大地

第　53　号
2016.9.25.発行

浄　國　寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎　睦

整然と富山平野の植え田かな
喜寿米寿卒寿と速し合歓の花
百歳にまだ十年ありし天高し
満堂の語り聞き入る秋の夜
句を拾い句を捨て今年あと僅か
凍瀧の沈黙という深さあり

（平成十七年 作 九十歳）

暑さ寒さも

山崎隆史

暑さ寒さも彼岸まで、と言います。

春の彼岸の頃になれば寒さがぶり返すこともなくなる、秋の彼岸の頃になれば暑さがぶり返すこともなくなる、という事を表した言葉だそうです。

そもそも「彼岸」という言葉は、古インド語の「ニルヴァーナ」を訳したものです。音を漢字に写した言葉は「涅槃（ねはん）」で、同じ意味です。涅槃は煩悩の尽きたさとりの境地で、転じて釈迦の死を涅槃と呼びます。彼岸というのは簡単にいうと三途の川の向こう岸、煩悩の境界を超えた場所です。逆に煩悩まみれのこちら岸を「此岸（しがん）」といいます。

最初、「暑さ寒さも彼岸まで」とは、死んだら暑いも寒いも感じない、という意味かと思いました。次いで、「心頭滅却すれば」云々と同じで、煩悩を捨て去った涅槃の境地に至れば暑さや寒さにわずらわされる事もない、という意味かも知れないと考えました。

ところが、どっちだろうと思って調べてみたら単純に季節の寒暖の話で、拍子抜けしたものです。

彼岸会（ひがんえ）は春と秋にあり、春の彼岸は春分の日を中心とした七日間、秋の彼岸は秋分の日を中心とした七日間に行われます。ここから、春分の頃、秋分の頃を表す時節の言葉として「彼岸」と言います。

煩悩の尽きた覚りの境地、を表す言葉が、巡り巡ってなぜか、春分や秋分の頃を表す言葉になってしまった。改めて考えるとおもしろい話です。

浄國寺のホー[illegible]げます。

http://ww[illegible]ukokuji/

[illegible]です。

[illegible]だ作成途中

[illegible]地」のバック

[illegible]いろな情報を

[illegible]す。

[illegible]みてください。

真宗講座を受講して

妙高市国賀 釈一心（饒村一昭）

六十歳で定年になって、ボランティア中心の生活をもう十二年近く送っているが、この間、人様に読んでもらう事を前提に物を書いたことが殆どない。そういう事までして人様に訴えたい事とか、是非知ってもらいたいとか言う必要性をあまり感じないのだ。じゃあなんでこういう仕儀になったかを少し説明したい。

人間に悩みは付き物だと聞いたり言ったりする。本当にそうだろうと思う。若い時には若い時の悩みを沢山持っていろいろ悩んだ。七十二歳なろうとする今も、嫌になる位の悩みを抱えて生きている。若いころ知人から宗教の誘いを受けたりしたことがあった。その誘いには乗らなかったが、宗教も文学に似て人間が生きていく上で大切なものだという気持ちはずーと持って来た。もう少し勉強したいなと言う気持ちがあったところへ、昨年浄國寺様から真宗講座のお誘いを頂いて参加させて頂いた。浄國寺様からその時の事を何か書きなさいとご指示を頂いてはたと困ったが、ここは（たぶん）オリンピックと同じで、参加することに意義があるのだろうと書くことにした次第。

◇準備講座（一回）本講座（六回）まとめの講座（一回）

講師先生は圓照寺ご住職藤島直氏で、お話があたたかく、浄土真宗の話と身近な事を結び付けて分かりやすく話され、難しいながらも少しは心に残ったかなと感じた。ただ一年たった今は内容的な事はみんな忘れていて小人度し難しの感が深いが、それでも何か残っているだろうと思ったりしている。

◇後期教習（本山）

後期教習は忘れ難いものになった。

一つは体調の事。二日ほど前から風で体調をくずし、医者にかかったりして参加できるか気をもんだ。教習中心配を抱えての研修となったが、結果的に皆さんのお世話になりながら何とか目的を達成することが出来て本当にありがたかった。

二つは帰敬式の事。御影堂での剃刀の儀は、本当に心改まるものだった。

三つは清掃奉仕の事。床の掃除をしたが、床を磨くことは己の心を磨くことと念じて一生懸命に磨いた。短い時間だったが得難い経験をした。場所という要素も人間の心には重要な事に違いない。東本願寺の床と我が家の床はやはり違うのだ。もっとも家でも雑巾掛けはめったにやらないが。

もちろん講義、座談会等他にもいろんな研修があったし、全員一堂に会しての食事も印象深いものだった。ただ後々まで心と体に残るのは体を使った経験、苦労したこと等、どちらかと言えば厳しい研修かなと感じている。チャンスがあれば厳しい研修に参加してみたいなとは思っている。もちろん厳しさにも程度があるし、ひとによって様々だが

◇法名

浄國寺様にお願いして四つ候補を選んでいただいて、その中から「釈一心」をお願いした。四つ候補にはいずれにも「一昭」の中から「一」を取って頂いたので、問題はその後につく字に何を選ぶかという事だった。「道」「行」「乗」にも魅力はあったが、最後は「心」にした。これからの人生いずれにしても「心」をどう保つかという事が一番大事なことになるんだと自分で思えたからである。

後期教習（本山）での宣誓文で決めた朝夕のお勤め、お寺行事への協力はなかなか十分に実行できないが少しずつと思っている。本音を言えば自分の心の安定の為にやっていることであって、申し訳ないけれどもあまり推進員としてはお役に立たないなと思ったりしている。

ものを見る

山崎隆昌

作家の森鴎外は、ドイツ医学を修め陸軍軍医として活躍した。この森鴎外と並ぶ人に、イギリス医学を修め海軍軍医として活躍した高木兼寛がいる。二人とも江戸末期に生まれ、明治から大正期に活躍した人。

高木は船上生活の多い海軍から脚気を駆逐することに苦闘し成果を上げた人でビタミンの研究にも力を注ぎ、日本で初めて医学博士号を受ける。また一方でカレーライスを世に広めた人としても知られる。

「病気を診ずして病人を診よ」は、医学の基本的なあり方を示した高木兼寛の言葉。

一般に病気とは、体温が高いとか、眠れないとか、ケガをしたとか、心身に異常があったり、苦痛を感じたりする状態をいう。

私は、暗くなると無性に酒を飲みたくなる。これは病気かどうか判断の難しいところ。

病人とは、病気に悩み、苦しむ人のこと。

高木は「病状」を診るより、苦しむ「病人」を診なさいと言う。

現在の東京慈恵会医科大学は、明治十四年、日本初の私立医学校として高木兼寛が創設した。大学理念は「病気を診ずして病人を診よ」

この東京慈恵会医科大学の学長を務められた阿部正和先生は、高木の言葉について次のように述べられている。

「医師である以上、病気の成因、診断、予後、あるいは正しい治療を行わなければならないことは、当然でありますが、それ以上に重要なことは、病気に悩む人間を全体的にみる、病に苦しむ人間をみるということが大事です」

阿部正和 著『続・学術道』より

現代はデジタルの時代である。ネットを使えば、病気に関わる情報など容易に、しかも無限に手に入れることが出来る。ある医者が苦笑しながら言うには「受診する患者が、自分の病気の情報をかき集めてくるんだよなあ」と。一方医師の側も検査、検査そして検査、診察は情報の詰まったパソコンと睨めっこ。そして、お土産は抱えるほどのお薬だ。

むろん、眼差しの温かく、魅力的な医師も多く居られることは言うまでもない。

本年二月、東京大学精神神経科の岡村先生の講演『認知症の基礎知識』を聴講する機会があった。お話を先生は次の言葉で結ばれる。

「人には生物学的な生命（いのち）がありますが、同時にその人の歴史としての生命（いのち）があります。そのことをしっかり見てください」

その人がこの世に生を受けてから、刻んだ一つ一つの出来事、数え切れない関係した人々、変化し続けた環境等々、その歴史の上に現在のその人が立っているのだと述べられる。

人を見ることは、医療に限られたことではなく、生活の中で誰もがぶつかる問題だ。

私たちは人に出会い、その人を見るときに、ともすると、学歴、地位、職業、財産、風貌や容姿など、外面（情報）だけで判断してしまう傾向にあり、用心しなければならない。

今の時代は「無縁社会」と呼ばれ、消化できない溢れるばかりの情報と、追いかけられているようなスピードに振り回されて、益々人間関係が希薄になっている。不幸なことに、それが当たり前（便利）となり、情報とスピードの中に居ることで安心するところがある。

昭和五年、二十六歳で夭折した金子みすゞの詩には、関わる全ての生命（いのち）への畏敬の念にあふれていることを感じる。

大漁の陰に泣く海の魚に心を寄せ、虫や草花のたましいに感動し、人を恋し、星や空や風を楽しみ、仏様に手を合わせ感謝した

金子みすゞは、生まれた仙崎村と下関以外、ほとんど外に出なかった人だった。脚本家の早坂暁は、矢崎節夫との対談の中で、金子みすゞに広がる詩の世界を「行動範囲はまことに狭いものですね『井戸の中から宇宙を見たよ』という感じです」と表現しているが、金子みすゞの生命（いのち）への讃歌は、ひたすらパソコンを駆使しながらグローバル志向に固執する現代人への警鐘にも聞こえる。

ワン公物語⑭

―華のつぶやき―

山崎　華（慎子代筆）

私は華。九才三カ月のパグ犬の雌。

『大地』編集者である父さんが家族に告げる。「そろそろ原稿にとりかかってね」母さんが少々不満そうに問うている。「私はまたワン公ですか？」「はい、ワン公です」「私だってたまにはワン公物語から離れて書きたいことだってあるんだけどなァ」「でも、ワン公です」「どうして編集者の意のままなの？」「うーん、まぁね」

傍らで聞いている私は「母さん、いくらでもつぶやいてあげますよ！」と既に準備万端なのだ。

という訳で、この夏の父さんのお酒にまつわるエピソードをひとつ。

父さんの酒好きはつとに有名である。この人はお酒が呑めなくなったらどうなるんだろう、と母さんは時々半ば本気で心配になる。その父さんがこの夏、ほぼ二週間、お酒を断ったのだ。

お盆の永代経会も間近な八月四日の朝「痛風かも知れない」と突然父さんが告げた。そういえばこの人、昨日あたりから足を引きずっていたっけなァと母さんは思う。でもあることで父さんに腹を立てゝいたので、あえて気付かないふりをしていたのだ。それもそろそろ潮時かな、と思っていた矢先のことでもあり、痛風ともなれば意地を張ってもいられないという訳で病院に向かった。足の親指が腫れて靴も履けず鋭利な痛みがあるという。お医者さんとのやりとりの後「検査結果を待たずに、とりあえず見切り発車をしましょう。ただ、擬痛風というのもありますからねぇ」薬を処方して頂き、当然その夜からは禁酒。

八月七日はこのお寺の永代経会という行事で、本堂でのお参りの後、お庫裡でのお斎（会食）である。近年は夏の暑さが厳しくなる一方なので、ビールが歓迎される。母さんの心配が膨らむ。折よくタナカさんの姿を発見。タナカさんは父さんのことを「先生」と呼ぶのだが、なんと酒の先生なんだって。父さんを一度やっつけたいタナカさんは気合を入れて車を置いてきた。母さんが「タナカさん今日はバトルは無理だよ」「？」「あのね痛風らしいんだ」タナカさんは戸惑う。情報は瞬く間に拡がり、お斎の席になっても誰ひとり父さんにアルコールを勧める人はいない。母さんの仕業だと父さんが気付くのに、そう時間はかからなかった。「やられた！」と思ったのか「助かった」と思ったのか私は知らない。

そんなふうでお盆過ぎに再受診する迄のほぼ二週間、父さんはアルコールを殆ど摂らず腫れも痛みも治まって受診の結果、血液も尿も検査は全てクリアして痛風の疑いは晴れ即アルコールは解禁という次第。

いとこのマユミさんは、事の推移をとても心配してくれていたのだが、母さんからの報告を聞いて大いに喜び安心してくれた。でも、それ以上にマユミさんを驚かせたのはいざとなれば父さんが二週間もの間、禁酒できるという事実だった。

マユミさんが（タカマサさんて　その気になればお酒我慢できるんだ）多分無意識のうちに、三度も四度もそう呟くのが、私は面白くてならなかった。

私はワン公なので、お酒の旨さ、楽しさなんて分からない。その点、母さんと私は仲間だ。

ただ、このお寺で何やら行事がある度に、私はほぼ一日中放ったらかされて、ともすると食事さえ忘れられそうになるのが悩みのタネなのだ。

私があんまりおとなしく、お利口にしているので、時折「お宅に本当にワンちゃん居るんですか？」「何にも気配がありませんね」と言われることがある。

私は胸をそびやかす。母さんも少し嬉しそう。だから時々お寺が賑やかなのは、マ・イイか！。でも父さん。お酒は……マ・イイか！。